

私たちはどこへ行くのか (3)

代表取締役 鈴木 英 介

「これまで言ってきた『情報』とは『データ』の事ではない。しかし『情報』と『データ』は同じ場所に混在している。データとは単なる数値か出来事だ。それに対して情報とは「AはBである」という方向を含むものである。データが情報となるためには論理が必要だ。

これに竿をさす動きもある。いつの時代も大きな変動期には大きな反動がある。既得権益が脅かされていると思う者は抵抗を試みるものだ。そもそも情報などと言うものが力を持つことを受け入れられない階層もある。

世界中に吹き荒れる原理主義、排他主義の波だ。先進国では〇〇ファースト呼ばれている。

「都民ファースト」「日本人ファースト」「アメリカファースト」と。奇しくも皆同じことを言う。それは同じ社会状況を反映しているためだ。〇〇ファーストとは自分達を優先せよ！という主張なので一般論ではなく、想定される他者に対して言っている。自分が後回しにされ、不利を被っているという主張だ。それは原理主義と結びつく。最初の原理に立ち戻れとなる。今は原理が変容していると言う。排他主義も別の面から同じことを主張する。外部の変容圧力から守れという事だ。その原理とはなんだろうか。原理は必ず過去にあり霧がかかっている。いずれにせよ変容、変化に對

する抵抗である。そしてそこには仮想敵がある。宗教的主張であっても、政治的主張であっても動があつての反動なので、動きにブレーキをかけたり、邪魔したりする事はできても何かを作ることはできない。新しいものに変わっていくというイノベーションとは相いれない。

人類はこの地球に満ち、
情報はその人類に遍く広がる。爆弾の雨の降るガザでも、キウでも人々はスマートフォンを持つている。情報は世界中を駆け回る。これほど世界の人が同じ情報に接する事はかつてなかった事だ。この時代に広がる主張は、普遍性や多様性ではない。「真善美」の普遍性はイデオ

ロギー的根拠を失い、普遍性のない多様性は存立根拠を失う。

人々がこの情報社会を鶴（ヌエ）のように感じるのには理由のない事ではない。情報の本質は姿がサル、タヌキ、トラ、ヘビで声はトラツグミというヌエそのものであるからだ。これに対して個人はそれぞれの具象を生きている。その環境で自分ファーストを主張する。皆このヌエに対して脅威を感じているのだ。

人々は情報の洪水のなかで、いやも応もなく必要な情報を選択している。時々刻々と選択が必要だ。そのため無用な情報に埋もれるわけにはいかない。

1950年から75年が経つ

た。私たちはこの時代、激動の変化を見てきたはずだ。世界は今後どこへ進んで行くのか。〇〇ファーストの調整がつかず、最後は核戦争となつて人類の時代は終わるのだろうか。その前に核保有国のデイル（取引）によって核保有国ファーストの世界になるのだろうか。

理念や道理ではなく、力が支配する世界が来る。トランプ氏の「デイル」とはそのような意味ではないのか。トランプ氏の主張には「なぜ力のあるものが弱者や少数派に氣を使つたり、助けたりしなければならぬのだ」という素朴な感情がある。

翻って経済を見てみる

と、資本の大衆化（商品化）の中で労働の質は大きく変わった。現代では多くの人がパーソナルコンピュータを操り、スマートフォンで世界中の情報を見ている。現場での労働も組織労働となり、個人は組織の一員であることが求められている。分業は仕事の細部にまでいきわたり、個々の労働をつなぐ情報管理こそが労働の要となる。

どのような大会社であつても、自社で全ての業務を行つていくわけではない。むしろ大きな会社ほど業務の外部委託は進んでいる。このネットワークシステムは世界規模に展開する。

商品の企画、原料の仕入れ、加工、在庫管理と輸送、販売。分業は細部にまで及んでいる。このため特化された仕事はより専門化し洗練されていく。実際の仕事を取り出せば何を作っているかも分からない製造物も多い。次の工程がなければ利用価

値のないものだ。

そしてこの分割された業務を繋ぐものが情報である。情報なくして分業はない。分業なくして成長はない。成長なくして人類の未来はないのだ。人類の増加が止まらない限りこの傾向が変わる事はない。しかもこの変化は驚くほどのスピードで加速している。分業と集中が21世紀の趨勢となる。21世紀もすでに四半期を過ぎた。後四半期、2050年には世界人口は100億人に迫り、AIの世界になっているだろう。

当社は1956年に創業し、今年でちょうど70年となる。先期9月決算での売り上げは58億円となり従業員は1800名を超えた。その新潟県では毎年2万人以上の人口減少が続いている。しかし私たちの仕事であるビルは減っていない。木造家屋がビルに変わるためである。それは全世界的傾向で、現代はビルの時代なのだ。

ビルが増える理由は、組織的生産活動と関係がある。分業した多数の人々が協業するために近くにいる必要がある。それが知的生産活動、つまり情報が多ければ直接の打ち合わせ（情報交換）が必要となる。そのためにはビルと通信設備が要となる。また知的労働にふさわしい良好な作業環境も必要だ。そしてビル同士が繋がりが都市ができる。それ以外の地域は生産現場としては廃れていく。地域も用途により二極化する。

かつてない都市化、都市集中が起こる。21世紀は都市の時代、ビルの世紀と言われるようになるだろう。そしてその主役は知識労働者である。私たちの行く道は決して光り輝く道ではない。地球が有限の場所である限りいつかは進歩の止まる時が来る。しかしその時はまだ遠い。私たちホモサピエンスはアフリカを出てから、たった10万年しか歩んでいないのだ。

